

## 序：主イエスを陥れるための質問

20章からは主イエスと敵対者との論争が繰り広げられてきました。祭司長や律法学者といったイスラエルの指導者たちはイエスを陥れようと様々な質問を浴びせかけました。今日の箇所の前のところでは回し者(スパイ)まで遣わし、ローマ皇帝への税金に関する質問を投げかけました。しかし彼らは結局イエスの言葉尻をとらえることができず、その企みは失敗に終わったのでした。

### ①サドカイ派の質問 (27~33)

それに続く今日の箇所ではイエスの新しい論敵が現れます。それがサドカイ派の人々です。今「新しい」と申し上げましたが、このサドカイ派も広い意味ではイスラエルの指導者たちに含まれます。やはりイエスに敵意を抱き、何とか陥れようと狙っていたのでしょう。彼らがイエスに質問したのは「死者の復活」に関してでした。なぜなら27節にあるように彼らは復活があることを否定していたからです。

#### ・サドカイ派とは？—復活否定と世俗的な生き方

このサドカイ派もファリサイ派と同じようにユダヤ教の一派です。サドカイ派は祭司や貴族階級、裕福な人々が属していたグループです。「サドカイ派」という名前の由来は、ソロモン王の時代の有名な祭司ツアドクから来ていると言われています。バビロン捕囚以後はこのツアドクの子孫が祭司長になっていったようです。

サドカイ派の人々は政治的には世俗的であり、ローマ帝国の支配を受け入れていました。そのことによって自分たちのこの世における名誉や特権を維持しようとしたのでしょう。

その一方、彼らは宗教的には保守的でした。ファリサイ派の人々は旧約聖書だけでなく、それを解釈して作られた父祖たちの伝承(言い伝え)も権威あるものとして重んじたのですが、サドカイ派の人々は書かれた聖書のみを権威あるものとして承認しました。その中でも特に創世記から申命記までのモーセ五書を彼らは重要なものとして強調し、重んじていました。そして彼らはそのモーセ五書には「復活」については教えられていないと考え、死後の命や死者の復活というものを否定していたのです。ファリサイ派の人々は復活を信じていましたから、この点でサドカイ派とファリサイ派の人々は対立関係にありました(使徒23:6-8参照)。

サドカイ派の人々が復活を信じてなかったということは、彼らにとっては「この世」だけがすべてであったということです。死んだらそこで命は終わりなのですから、この世のことだけが大事になります。実際彼らは貴族階級に属し、この世での地位や名誉、財産を持っていたでしょう。彼らはそれらを維持すること、持ち続けることを大切なことと考えました。そのためには異邦人であるローマ帝国の支配をも受け入れ、協力したのです。その意味でサドカイ派が復活を信じないことと、彼らの世俗的な生き方とは結びついていたと言えるでしょう。

使徒パウロも第一コリント15章32節で次のように言っています。

「もし、死者が復活しないとしたら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」ということになります。」

もし死者の復活がなく、死んで終わりであるならば、自分の快樂、楽しみを追求する生き方になってしまうのです。現代の多くの人もそのように生きているのかもしれませんが。そしてそれが正しい、合理的な生き方だと考える。そして「死者の復活」などというのは、迷信じみた不合理なことだと考えるのです。

今日の箇所に出てくるサドカイ派の人々も、復活がいかにも不合理なものであるかを示すためにイエスに質問をしたのです。

## ・質問の内容と意図

### 28 節

「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。」

これはモーセ五書の中の申命記 25 章 5 節 6 節に記されている、いわゆるレビラート婚の規定です。自分の兄弟が妻をめとったが、子どもを残さず死んでしまった場合、その弟が彼女と結婚し、兄のために子孫をもうけなければならない、というものです。その目的として申命記 25 章 6 節には「彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない」と記されています。

そのようなモーセ律法を引用した上で、彼らは次のような問題をイエス様に出しました。29 節から「ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。次男、三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」

これは実際に起こったことではなく、サドカイ派の人々が考えた話でしょう。七人兄弟の長男が妻をめとったが、子どもがないまま死んでしまった。そこでレビラート婚の規定にしたがって、次男、三男と順々にその女をめとったが、7人とも同じように子どもを残さず死んでしまった。そして最後にその女も死んだ。そうすると、復活の時、その女は誰の妻になるのか。最初にめとった長男の妻になるか、最後にめとった末っ子の妻になるのか、あるいは7人全員の妻になるのか。どう考えてもおかしなことになるのではないか。このようにサドカイ派の人々はモーセ律法に基づきながら、復活を想定するとこんなおかしなことになってしまう。だから復活は不合理なものであり、それはモーセ律法が教えていることではない。そうやって彼らは律法に基づいて復活がいかにも不合理なものであることを示し、それを否定しようとしたのです。彼らのイエス様への質問はそのためのものでした。

## ②主イエスの答え (20:34-38)

### ・復活に関する正しい理解 (20:34-36)

それに対してイエス様はどのように答えられたのでしょうか。34 節から 36 節。

「イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」

イエス様はサドカイ派の人々の質問の前提がそもそも間違っていることを示されました。サドカイ派の人々は、復活した後、その女は7人兄弟のうちの誰かの妻になると想定していました。しかし、イエス様は「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない」と言われたのです。「この世」と「次の世」が対比されています。「この世の子ら」は「めとったり嫁いだり」して結婚しているが、「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は」、そもそも「めとることも嫁ぐこともない」、結婚しないのだ。イエス様はそのように言われたのです。

そしてその理由として「この人たちは、もはや死ぬことがない」と言われています。「この人たちはもはや死ぬことができない」と訳すこともできます。この世では人は死んでいきます。だから子孫を残す必要がある、後継ぎを残す必要があるのです。しかし来たるべき世において復活した者たちは、もはや死なないのです。ですから、子孫をもうける必要もない。そのために「めとったり嫁いだり」する必要もない。結婚する必要がない。そのようにイエス様はおっしゃっているのわけです。

しかし、こう考えると「では結婚は子孫をもうけるためだけにあるのか」と疑問に思われるかもしれませんが。確かに創世記1章28節には神様が人間を祝福して「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」と言われたことが記されています。そのために結婚という制度もあると考えることができます。しかし聖書が教える結婚の目的はそれだけではありません。創世記2章18節で神様は「人が独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」とおっしゃり、そのために男のあばら骨から女を作られたことが記されています。すなわち、結婚とは「人が独りであるのは良くない」ので、神様が造ってくださった「自分に合う助ける者」と結ばれ、一体となることなのです。イエス様も当然、そのことはご存じだったはずですが。ではなぜ、復活の後には結婚しなくなるのでしょうか。その理由としてイエス様は36節後半で次のようにおっしゃっています。

「天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」

この世において人間は不完全で欠けのある存在です。それゆえ「自分に合う助ける者」が必要であり、結婚もそのためにあるのです。しかし、復活後、来たるべき世において人間は「天使に等しい者となる」とイエス様は言われます。天で神に仕える天使のように、人間は完全で栄光に満ちた存在になる、ということでしょう。また「復活にあずかる者として、神の子だからである」とも言われています。イエスキリストを信じる私たちは既に神の子どもとされています。しかし、復活までは不完全な存在です。「神の子ども」でありながら、まだ未熟であり、成長段階にあるのです。復活にあずかる時はじめて、「神の子」として完成する、成熟に達する、完全な意味で「神の子ども」となるのです（ローマ8:23参照）。栄光に輝き、愛に満ちた神の子どもとなるのです。その時にはもはや結婚という制度は不要となります。それはこれまでの夫婦が見ず知らずの赤の他人になるということではありません。む

しろ、完成した神の子らとして、皆が互いに愛し合うようになる。父なる神の愛を受け、神を愛し、神の子らを愛して生きるようになるのです。

そのようにしてイエス様はこの世と来たるべき世では、人はまったく違った存在になることを示されました。サドカイ派の人々が考えたように、復活後の生活はこの世の生活の単なる延長ではないのです。復活を通して人間は異なった存在に変えられるからです。この世では老い、衰え、病気になり、死んでいく人間であるが、復活後は朽ちることがない、死ぬことができない存在となる。この世では欠けの多い存在であるが、復活したならば、天使のような存在、栄光に輝く神の子どもとなる。そのように神様によって変えられる。それゆえもはやめとることも嫁ぐこともない。イエス様はそのようにして復活に対する正しい理解を示されたのです。

#### ・復活の聖書的根拠—神によって生きている (37-38)

そしてイエス様の答えの後半部分が 37 節、38 節です。

「死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

ここでイエス様は復活の聖書的根拠を示しておられます。「モーセも『柴』の個所で」と言われていますが、これは出エジプト記 3 章を指しています。死者の復活についてはイザヤ書やダニエル書などにもっとわかりやすく預言している箇所があります。しかしイエス様がこの箇所を選ばれたのは、答えの相手であるサドカイ派がモーセ五書を重んじていたからだと思われれます。ですからイエス様はあえてモーセ五書の中の出エジプト記から御言葉を引用されたのです。

それはモーセが燃える芝の中から神様の声を聞き、召命を受ける場面です。そのとき神様はモーセに対し「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」とおっしゃいました (3:6)。イエス様はこの言葉に言及しておられるわけです。しかしなぜモーセが主を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼んでいることが、死者の復活を示していることになるのでしょうか。すぐにはわかりにくいことです。イエス様はその理由として 38 節で次のように語っておられます。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

「すべての人」とは原文では「皆」ですが、これは直前に出てくるアブラハム、イサク、ヤコブを指していると思われれます。神様がモーセに語りかけた時、アブラハム、イサク、ヤコブはだいぶ前に死んでいました。しかし、彼らは皆、「神によって生きている」とイエス様は言われるのです。「神によって」という言葉は「神に対して」と訳されることもあります。彼らは死んでしまいましたが、神によって、神に対しては生き続けている。それゆえ「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」と言われています。アブラハム、イサク、ヤコブは神様との契約関係の中に入れられたのですが、彼らはその神様と交わり・関係の中で今も生き続けている。そして復活の時を待っている。モーセが主を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼んでいることは、そのことを示しているとイエス様は教えられたわけです。

## ・人々の反応

これを聞いた人々の反応が 39 節に記されています。

「そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。」

この律法学者はファリサイ派の人々だったのと思われます。彼らは死者の復活を信じていましたから、イエス様がサドカイ派の人々に対して聖書に基づいて復活を擁護し、論証されてことをほめた、称賛したのでしょうか。

そして 40 節には

「彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。」

これまではいろいろな質問をしてイエスを陥れよう、言葉尻を捕らえようと企んでいたのですが、この時からもはやだれもあえてイエス様に質問しようとはしなくなった。この人には何を質問しても無駄だ、勝てない、と彼らは諦めた。負けを認めたのです。

## 結論：復活の信仰と希望に生きよう

私たちの周りにも「死者の復活」を不合理なもの、愚かなものとして考え、信じない人々は多くいるのだと思います。しかしイエス様は死者の復活こそが私たちの真の希望であり、聖書が教えていることであると語っておられます。

私たちは今は老い、衰え、死んでいく存在です。しかし復活する時には今とは異なる死ぬことのない、天使のような存在、栄光に輝かく「神の子」に変えられるのです。たとえ地上で死んだとしても、神によって、神に対して生き続けることができる。それは 35 節で言われているように「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々」に与えられる大きな恵みであり希望です。この「ふさわしいとされた人々」というのは、「神によってふさわしいと認められた人々」という意味です。ではどのような人が次の世に達し、復活するのにふさわしいと認められるのでしょうか。全く罪のない正しい人でしょうか。そうではないはずです。ここに出てくるアブラハム、イサク、ヤコブも人間としての弱さ、罪がありました。旧約聖書を読めばそのことは明らかです。しかし彼らを神様はふさわしいと認められたのです。それは神様が彼らに契約、約束を与え、彼らがそれを信じたからです。その信仰を神様は義と認められた。ふさわしいと認められたのです。

私たちも神様の救いの約束、そしてそれを成就するために来てくださったイエス・キリストを信じるならば、神様からふさわしいと認めていただける。そしてこの世で死んで終わりではなく、次の世に達し、復活させていただけるのです。この復活の信仰と希望をもって地上の旅路を歩んでまいりましょう。